雪の朝

生美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雪の朝

【Ｎコード】
Ｎ６８５３Ｏ

【作者名】
生美

【あらすじ】
冬の朝の話。今朝起きたらとても寒かったです。もう冬ですね。

目が覚めると既に日が昇っている様だった。窓を見やると、カーテンの隙間から光が漏れている。いつになく部屋の中は冷えていて、肩口の僅かな隙間から冷気が滑り込み貴重な温度を奪うかのように背中を撫ぜている。
島村はその隙間を埋めようと、布団を引き寄せて膝を抱え込むように体を丸くし、冷たくなり始めた足先を毛布でくるんだ。そうして暫く布団の中でゴソゴソしていたが、ようやく諦めて上体を起こした。

外から子供の声が聞こえる。窓に近づいてカーテンを引くと、微細な水滴に覆われた磨ガラスのような表面に、低温の層がじっとしていた。それを通してでは、外の景色をはっきりとは見ることが出来なかったが、まるで強く白光しているかのようで、島村は目の奥に刺さるものを感じて目を細めた。
思い切って窓を開けてみた。とたん、ひえびえしたとした空気が彼の耳鼻をかすめて部屋の中へと流れ込んだ。

アパートの三階の窓からは、隣近所の住宅の屋根が厚い雪に覆われており、路面には車の通る所だけに灰色のラインが引かれているのが見えた。直ぐ傍の路肩を見下ろすと、鞄を背負った子供たちが幾列かになって歩いている。慎重な足取りでゆっくりと進む子供達は、皆真剣な表情だったが、けれどもその両頬は赤く染まっていてどこか喜んでいるようにも見えた。眼前から遠方へと視線を向かわせると、山際が雪で白く縁取られて、青空との境を明確にしている。

自分の子を見送りに来たらしき女性が、列の後方から声をかける。
「気をつけなさいよ。」

一人振り返った少女が頷き、片手を挙げて、
「いってきまあす。」
とそれに答えた。少女の声は澄んでいて、辺りの情景に儚げな音が響き融けた。

そんな母娘のやりとりを眺めながら、島村は、今日は母の見舞いに行く日だったと思い出した。光を集めるように設計された明るい白壁、薬が載った金属盆とそれを運ぶ白衣の人、病室にかすかに漂う体臭とベッドで眠る浮腫んだ母の顔を思い浮かべた。
冬の白さ冷たさは神秘的だが、病院のものは確かな現実を必死に食い止め、あるいは覆い隠すものでしかない。

彼はつんとした冷気で冴えてきた頭でそんなことを考えながら、この寒さは堪えるだろう、何か暖かいものを持っていこうと、窓を閉めて身支度を始めた。

（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました。
習作故、瑕疵多くあったかと思いますが、講評・感想など頂けると幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6853o/

雪の朝

2010年11月4日12時33分発行